

来年の大河ドラマは、明智光秀を主人公にした「麒麟がくる」です。

元来が謎に満ちた人物ですし、ここに来てドラマは大波を受けていますが、無事な船出を祈りたいものです。私たち燦歩会が近畿地方を巡る中で、しばしば明智光秀の軌跡に触れて来ました。大河ドラマスタートに向けて、そのいくつかをご覧頂きましょう。

坂本城

滋賀県大津市坂本は、明智光秀が城を構えた土地です。

今年5月に比叡山麓を歩いた際に立ち寄りました。

織田信長は1571（元亀2）年9月12日の比叡山焼き討ちの後、坂本の経営を明智光秀に任せます。

比叡山の勢力を抑え、またその麓で運輸・商業など活動の盛んな町坂本をコントロールする為です。

光秀の生年は1528年（？）とされていますから、43歳頃でしょうか。

坂本の琵琶湖畔に城を築き、本能寺の変までの10年間の本拠地とします。

城の中心は従来、上の写真の辺りと考えられていました。

所が、1994（平成6）年の琵琶湖の大湖水の際の調査で、石垣列や屋敷跡が見つかり、坂本城の本丸は、琵琶湖に突き出た「水城」である事が確認されました。右の写真の辺りです。

「坂本城址」の碑の周りには、大河ドラマ「麒麟がくる」を待つ水色のノボリが林立していました。

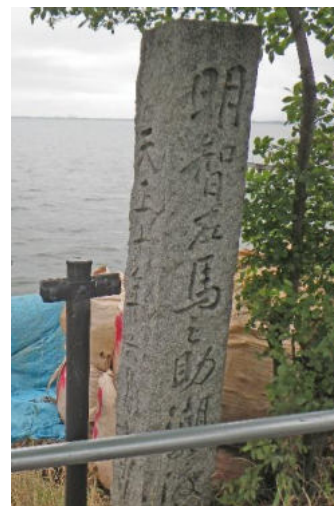
坂本の城について、イエズス会の宣教師ルイス・フロイスは、長文の報告書「日本史」の中でこう記しています。「明智は、比叡山に近く、かの大湖のほとりにある坂本と呼ばれる地に、邸宅と城砦を築いたが、それは豪壮華麗なもので、信長が安土山に建てたものに次ぎ、この明智の城ほど有名なものは天下にないほどであった。」と。

また薩摩の国のプリンス島津家久も伊勢詣での途次坂本の城を訪れ、明智光秀に面会しています。1575（天正3）年5月14日の事です。光秀に船に招かれ、琵琶湖に出て城の周りを漕ぎ回って見せてもらいます。五月雨の晴れ間、月が煌々と湖面を照らし、まことに絵の様な景色だったと記しています。



翌日は城の内部へ。「城の内一見。さて城の蓄えは、夫々の倉、薪などまで積み置く事、言葉に及ばず…」一見優雅に暮らしているかのような光秀ですが軍備は怠りなく、その武将としての油断ない一面を、島津家久もさすがに見逃してはいません。本能寺の変は、島津家久の訪問から7年後の事です。

光秀の敗死直後、娘婿明智秀満は安土から急ぎ坂本の城に戻ります。その時、琵琶湖を馬と共に泳いで渡り坂本に駆け付けたという伝説があるのです。一昨年琵琶湖岸の膳所を訪ねた際に、この「明智左馬之助湖水渡り」の石碑に出会いました。しかし秀満は奮戦の甲斐もなく、城に火を放って妻女・家臣と共に討ち死にします。坂本城はその後再建されるものの、1586年に廃城になります。



福知山城

京都府福知山市の福知山城を訪ねたのは、今年3月でした。

光秀は1579年（天正7）年8月、丹波の国の豪族たちを平定、翌年織田信長からこの地を任せ、城と町の整備を進めます。ただ光秀は主に近江坂本の城に居て各地を転戦、しかも2年後の6月には「本能寺の変」を起こして倒れますから、どこまで自ら福知山の街造りにタッチしたのかは分かりません。（実質は娘婿の秀満が差配したとも考えられています）しかし今日の福知山の礎を固めた名君として、地元では篤く尊崇され、町は今、来年に迫った大河ドラマを心待ちにしているのです。



天守閣の石垣の境目から左半分は、
光秀の時代のものと云われています。

勝竜寺城

3年前の5月には、西国街道を歩き、京都府長岡京市の勝竜寺城跡を訪ねました。

1582（天正10）年本能寺の変の直後、豊臣秀吉との「天下分け目の天王山」の戦いに敗れた光秀は、この勝竜寺城に逃れます。

この城には、以前光秀の娘玉が嫁いで来ていました。後の細川ガラシャです。

城の中には、こんな熱烈なポスターが貼られていました。ポスターから見るとテーマは細川一族のようですが、今、地元の方の想いが一部実現に近づいている訳です。



写真左から、細川幽斎、細川忠興と玉（ガラシャ）、そして明智光秀

西教寺

今年5月訪ねた大津市の古刹西教寺（さいきょうじ）には明智家の墓所があり、今も手厚く供養されています。この寺も比叡山焼き討ちで焼失したものを、光秀が復興に力を添えたのだそうです。



西教寺



明智家墓所

私達より1週間程前に、俳優の長谷川博己さんがここにお参りしたと、ニュースが伝えていました。連続テレビ小説「まんぷく」でラーメン作りに没頭していた長谷川さんは、「麒麟がくる」の主演明智光秀になりきるためにここを訪れたのだそうです。

そう云えば、今年2月滋賀県日野町を訪ねた時には、「蒲生氏郷を大河ドラマに…」という立派な看板に出会いました。戦国の武将蒲生氏郷（がもううじさと）は一時期この日野の領主でした。28歳の時に伊勢に、そして最後は会津に封じられていますから、日野の時代はそう長くはないのですが、やはり故郷の人々の想いは熱いのです。



(文・写真 生島 (おじま) 幸弥)